

D. H. Lawrence における母性の問題

小 林 敏 男*

The Problems of 'Maternity' in D. H. Lawrence

Toshio KOBAYASHI*

(Received September 1, 1970)

E. H. Erikson, an American psychopathologist, remarks in his book 'Childhood and Society' that there are two typical types of a mother—one is a cold, dominant and rejecting mother and the other a hyper-possessive, overprotective one.

It may safely be said that the case of D. H. Lawrence's mother obviously belongs to the latter. Lawrence is said to be closely connected with his mother in the traits of his works as well as in the formation of his personality.

This essay aims at the analytic interpretations of mother's influences on Lawrence and the attached significances of them in the modern world.

I. Introduction : —

母が無意識に唄う子守唄は、それが無意識であるが故に '母の情緒' のおしつけがましさを露骨に感じさせるものである。洋の東西を問わず一般に母と子の関係には、これに似た極めて濃厚な情緒がかくされている。それは外見上は純粋な愛と情緒をよそおっているけれども、その背後の深奥部には極めて本能的なそれ故にきわめて肉感的なものがひそんでいる。

D. H. Lawrence が母の死に至るまで、ついに maturity のきっかけをつかめずにしたという事実は、その原因の解明にはおそらくここまでさかのぼらなければならぬ。

アメリカの精神病理学者 E. H. Erikson はその著書 'Childhood and Society' の中で、母と子の密着と母と子の疎隔との間にある子供の社会的成長の関係を述べているが、母の拒否にあった子供が社会性の未熟によって崩壊する悲劇とは対極にある D. H. Lawrence における母と子の密着ぶりにスポットをあて、Lawrence の人と作品への影響について考察するのが小論のねらいで

ある。

II. a) A cold, dominant, rejecting mother

母における二つの極端な典型を Erikson 流に a cold, dominant, rejecting mother と a hyperpossessive, overprotective mother とに分けてみるならば Lawrence の場合は明らかに後者にぞくしている。

現代アメリカ社会における a rejecting mother は、形態上は Lawrence における母子の間のあの "おしつけがましい、なまぐさい情緒" の欠如を伴うけれども、それはアメリカという unique な自然的、社会的、文化的、歴史的背景の上に成立つ現象に他ならない。

"In recent years the observations and warnings of the psychiatric workers of this country have more converged on two concepts: the 'schizoid personality' and 'maternal rejection.' Essentially this means not only that many people fall by the wayside as a result of psychotic disengagements from reality, but also that all too many people, while not overtly sick, nevertheless seem to lack a certain ego tonus a certain mutuality

*外国語系列 (Department of Liberal Arts and Sciences
—Foreign Languages)

in social intercourse.

Case history after case history states that the patient had a cold mother, a dominant mother, a rejecting mother— or a hyperpossessive, overprotective one.”¹⁾

a rejecting mother も an overprotective mother も、形態上は全く対極に立ちながら、子供の正常な成熟、社会性の発達を阻害する点では同じである。

アメリカでは現在 ‘Mothers’ という good and simple name の代りに、‘Moms’ (=informal: mothers, The Random House Dic.) とか、a ‘generation of vipers’ という名称が盛んに用いられているという。これは明らかに戯画的で憎悪と軽蔑を含んだ表現である。

アメリカの母は、子の成長と同時に a rejecting mother に豹変する。前述のように、アメリカという unique な国柄のもつ諸背景によってかもし出される一種の必然的な生活感情であり、Frontier 精神に由来するものといえよう。

我が子が遠いフロンティアで誰にも依存しないで独立した生活を送らねばならないことを知っているからであり、いわゆる ‘子を千仞の谷底へつきおとす’ Lion の習性に似たものであるかもしれない。

“Mom,” of course, is only a stereotyped caricature existing contradictions which have emerged from intense, rapid, and as yet unintegrated changes in American history.

To find its beginning, one would probably have to retrace this history back to the time when it was up to the American woman to evolve one common tradition, on the basis of many imported tradition, and to base on it the education of her children and the style of her home life; when it was up to her to establish new habits of sedentary life on a continent originally populated by men who in their countries of origin, for one reason or another, had not wanted to be “fenced in.”

Now, in fear of ever again acquiescing to an outer or inner autocracy, these men insisted on keeping their new cultural identity tentative to a point where women had to become autocratic in their demands for some other.”²⁾

a rejecting mother はかかる背景の下に、過保護的母性によって Frontier 精神をそこなってしまう

‘Anglo-Saxon patterns of child training’ に反逆するのである。

Mom はアメリカ社会においては、Erikson のいうようにその家庭においても共同社会においても、mores and morals における authority である。

““Mom” is the unquestioned authority in matters of mores and morals in her home, and (through clubs) in the community.”³⁾

遠いフロンティアで立派に独立させるために、子が成長する間もなく子を拒否するアメリカの母は、その点では此上なく先見の明があり、理性的で賢明な母である筈なのに、何故に ‘Moms’ とか a ‘generation of vipers’ という汚名を冠されているのであろうか。Erikson はその原因を次のように言っている。

1) “She permits herself to remain, in her own way, vain in her appearance, egoistic in her demands, and infantile in her emotions.”⁴⁾

2) “She teaches self-restraint and self-control, but she is unable to restrict her intake of calories in order to remain within the bounds of the dresses she prefers.”⁵⁾

3) “She stands for the superior values of tradition, yet she herself does not want to become “old.” In fact, she is mortally afraid of a rich life, namely the status of the grandmother.”⁶⁾

成長する間もなく母の拒否に出会って、傷心を抱いて放浪する子供は、あくまでも孤独であり、母との情緒の断絶は、やがて他人との情緒の断絶を招来するのである。

b) A hyperpossessive, overprotective mother

D. H. Lawrence における母と子の関係は、以上のべた、いわゆる a rejecting mother の場合とは対極にある。即ち、Lawrence の母は典型的な a hyperpossessive, overprotective mother であったといえよう。

Lawrence と母は “羞恥心” を媒介とした強いきずなどで結ばれていた。炭坑夫である夫、肉体だけで精神を持たない夫を持つという現実に対する不満が、息子への異常なまでに大きい期待と、不自然な愛情—肉感的なまでの一となって裏返されたのである。すなわち、“夫に対する恥しさ” を息子の “父に対する恥しさ” におきかえて、そうした共通の “羞恥心” というきずなどで、母は子をはがしながめにした。炭坑夫の夫を恥じる心理は同時に炭坑夫しか夫に持てない自分自身に対する恥しさとなり、コンプレックスとなっている。その結果、母は息

子が父とは全く異質な人間になるよう全心全霊を注ぐのである。

“男の子は自分のあとを継いで炭坑へ、女の子はどこか良家の女中へ” という考えを当然と思っている Lawrence の父は、その意味ではイギリスという伝統的社会の慣習の中に生きた人であり、そうした単純素朴な感覚で子供達に接したのである。Lawrence の妹 Ada の書いた ‘A Young Lorenzo’ の中で、水と油の関係の両親がはげしくぶつかり合う記述がしばしばみられる。

家族を単位とする伝統的な農民的な感情の中に安住しているのであれば“子を父親とそっくり育てる”ことは母の義務であり、同時に妻の生き甲斐となる筈である。しかし母にとって Lawrence はかけがえのない息子であると同時に、忌み嫌う夫の血をわけた子供であるということが、母にとって不安の種となり、息子の成熟を素直によこさぶことが出来なくて、Miriam, Clara をはじめ、すべての異性関係を阻害し、息子の精神も肉体もすべて自分の egoistic な情緒の中で独占しようとする。母の精神的な愛に飽和した息子は、母の情緒を荒々しくけちらしてとび出そうとするが、息子が徐々に異性関係を拡大していても、母は自分の優位を確信して疑わない。息子の心身両面における行動半径が如何に拡大されても、息子を自己の延長線上にとらえているから、母のきずなから脱出しようともがく息子の苦悩が大きければ大きい程、母は自分以外の異性に対する自己の優位の大きさをたしかめることになる。

血液を通して感ずるもの、肌を通してたしかめる感覚にはきわめて egoistic なものがある。成長して自分のもとを去っていく子供に対し、悲しみとはうらはらに頼もしさを感じる normal な母の情緒は、Lawrence の母には全く存在しない。それどころか、自分の血をわけたもの、自分の延長線上にあるものが“他人”となることに対して“おそれ”ばかりでなく“うらみがましい感情”さえも抱くのである。こうした“おしつけがましき”や“粘着性のつよい独占意識”を Lawrence の母は人一倍つく抱いていたのである。かくて‘son’であると同時に‘lover’であるという、一種の倒錯関係が生ずる。夫とは異なるものになってほしい息子が、はかならぬ夫の子であるという事実のために母は子を信ずることができない。息子が自分の思い通りに成長すればするなりに、息子は母から離れ、母を超えていかねばならなくなると、母は息子から完全にとり残されてしまう。すなわち、夫に抱いているコンプレックスから逃れるためには、息子は夫と異質にならねばならない。異質になれば必然的に自分から離れていく、そして自分と息子の間をつないでいる動物的な“親しみ”や“なれあい”の糸

がぶつとりと切断されて、母は再び孤独になり、一度失われた夫に対するコンプレックスの影に再びおびえる結果となる。これが Lawrence の母における愛と憎しみの Paradox となっているのである。

Lawrence はしばしば母から脱出しようとした。そうすることによってはじめて個人としての独立を得ようとしたのである。しかしそのたびに、母が無意識に唄う子守唄が、おしつけがましき Lawrence にからみつき、Lawrence はこの上なく不自由を感じず。そして八方やぶれの子は、ズタズタに引裂かれた心を抱いて母のもとにかえる。やがて母のフトコロで蘇生する。母に抱かれ、母の範疇で行動するかぎり子供はこの上なく自由なのである。又母は息子との粘着質の情緒を維持している間だけ生甲斐を感じ、この上なく自由なのである。

Lawrence は母に拘束されることにより自由という特権を与えられ、一方母は炭坑夫の夫によって経済的に拘束されることによって、夫を恥じる特権を与えられ、その結果息子を独占する自由を得るのであり、Lawrence と母との結びつきには、このような不自然で abnormal な要素がからんでいるのである。

精神的な愛に飽和したものが異性に求めるとすれば、それは肉体的側面に限定される。

Lawrence は Miriam によって、母からは求められない肉体的側面の要求をみたそうとする。霊と肉の対立がくりかえされる—それは‘Sons and Lovers’のテーマソングであり又、その後の全作品に共通のテーマソングでもある。Miriam が“精神”を具えて“肉体”を具えない女性であることが Lawrence の情緒のバランスをくづしてしまう。Lawrence にとって、Miriam は母の incarnation でしかなく、それ以上の強いきづがないだけに、その結びつきも薄弱である。Miriam が惜しみなく与え、Lawrence が惜しみなくうばう one-sided な関係は、肉体的側面の不調和によってもうろくも分裂するのである。‘Last Words to Miriam’にみられるように、Lawrence は Miriam との別離を唄いあげる。

You had the power to explore me,

Blossom me stalk by stalk;

You woke my spirit, and bore me

To consciousness, you gave me the dour

Awareness — then I suffered a balk.⁷⁾

この詩における最後の行“そのために、ぼくは邪魔物に悩んだ”とは、とりもなほさず Lawrence の肉体的側面の声に他ならない。そして肉体的側面の充足を果せない Lawrence は“霊をそなえて肉をそなえない a nun (尼)である”と Miriam をののしる。

"We can safely say, then, that Miriam is Wordsworth, at least in her attitude toward nature, or toward flowers. She is finally dammed by Paul as a nun."⁸⁾

そして Lawrence は Miriam とは正反対の女性 Clara のもとへ走る。しかしそれは肉慾だけをきり離れた殺那の旅であり、肉的側面の充足の傍らから霊的側面を求める気持がつよくなり、霊と肉の balance は完全にくづれてしまう。'Excursion Train', 'Passing Visit to Helen', 'Two Wives' などには、Lawrence の Helen(=Clara) への傾倒も認められるが Clara は所詮 'Release' にのべられているように、Lawrence が "さすらう大地" にすぎない。

Of my eyes, I see you beautiful, and dear
Beautiful, passive and strong, as the breath
of my yearning blows over you
I see myself as the winds that hover
Half substanceless, and without grave worth
But you
Are the earth I hover over.⁹⁾

Lawrence は Clara という "大地" をさすらうことにより、肉慾の充足を得ることは出来たが、彼の soul は徐々に不安定になっていく。肉慾の充足はその限りでは一種の成熟であるが、soul を伴わない成熟は不完全なものといわねばならない。従って Lawrence は Clara によっても成熟を果せなかったのである。

"He believes that Clara is unable to "keep his soul steady," that he is simply beyond her, in his creative and intellectual self, and in the breadth and depth of his emotional entanglement — which anticipates a later belief; that men and women must be in balance with each other, as individuals with distinct "life-flows" of their own, before genuine love can flourish. In 'Sons and Lovers', Clara falls short on this count: her "balance" with Paul is scarcely stable, and the growing uneasiness in their affair stable, and the growing uneasiness in their affair can be traced, for the most part, to her own inadequacy as an independent being."⁹⁾

Spilka は Lawrence における母と Miriam と Clara の関係を次のように述べているが、注目に値する。

"From his mother he drew the life-warmth, the strength to produce; Miriam urged this

warmth into intensity like a white light. Now Clara must be considered, for she adds to this life-warmth and creative vision the gift of manhood, the "baptism of fire in passion" which will enable Paul "to go on and mature." Indeed, nothing can nullify this verification which he and Clara have had together — "it was almost their belief in life."¹⁰⁾

Lawrence は母から life-warmth を与えられ、Miriam はその life-warmth を a white light のように激しいものに高め、Clara はそれに the gift of manhood を加えたのである。

Lawrence の成熟はかかる process をへて果されたのであるが、これは決して自然な、normal なものではない。

Lawrence はやがて、永遠の女性といわれる Frieda を求めていくことになるのであるが、Miriam も Clara も二人とも、母の an overprotective love にとりつかれた未熟児 Lawrence というとてもつもなく crazy で egoistic な人間の "いけにえ" であるといってもよからう。

"At the end of 'Sons and Lovers' a man is born; at the end of 'The Rainbow' a woman; and 'Women in Love' a man and a woman meet and marry. Here is a simple formula, too simple perhaps to account for the complex structures of the novels at hand, yet suitable enough for the conscious attempt, on Lawrence's part, to work out the conditions of manhood, womanhood and marriage, as he experienced or understood them in his own life."¹¹⁾

Lawrence は Miriam を 'a nun' とののしって、二人の愛は未完に終わったけれども、Miriam が Lawrence に果した役割は極めて大きい。Miriam は Lawrence の創作慾をかきたて、その作品を世に出すために献身的な努力をした。すなわち、母のおしつけがましい情緒から、又炭坑夫の父に対して抱くヒリヒリする恥しきから Lawrence を解放しようとしたのである。母のように自己の延長上で見守るようなことをしないで、成長して自分のひざもとを離れる息子に頼もしきを抱く normal な母の感覚を通して、自分のもとを離れて Clara へ赴く Lawrence をじっと見守ったのである。従って Lawrence を Frontier へ旅立たせた大いなる母であり、その精神的側面の完成者であるといっても過言ではない。Lawrence の死後 E.T. という initial で出版した 'A Personal History' は Miriam が Lawrence に捧げた

“墓碑銘” であるといえよう。要するに, Lawrence の母は情緒のおしつけがましきと、夫へのコンプレックスを息子の父へのコンプレックスにおきかえることにより, Lawrence を拘束したのに対して, Miriam は、母との動物的な親しさを切断する努力を通して, Lawrence を拒否し, Frontier へ旅立たせたのである。前者は悪い意味での an overprotective mother であり、後者は良い意味での a rejecting mother ということが出来る。Lawrence にとって母は、生母と Miriam の複数形で完成され、理想化されたのである。

Lawrence が個人として独立するためには, Erikson のいうように, Frontier を目指してわが子を拒否する、あの荒々しい拒否が必要であった。母との情緒の切断を望まないうちに、無理矢理に独立を強制されて、遠い Frontier へ旅立つ子供の孤独とは対極にあるが、母のおしつけがましきに呻吟した Lawrence もやはり孤独な未熟児であり、奇型児であったといえよう。

Lawrence は母の死によってはじめて成熟の第一歩を踏み出したのであるが、母の死後も可成り長い間、母の情緒からの脱出に苦しんだ。それは Lawrence には“死に向って漂う” ような苦悩であるが、そうした状態を端的に示すものとして ‘The Inheritance’, ‘Brooding Grief’, ‘Call into Death’ などの詩があげられる。特に ‘The Virgin Mother’ の最後の一節はそれを如実に示すものである。

Is the last word now uttered?
Is the farewell said?
Spare me the strength to leave you
Now you are dead
I must go, but my soul lies helpless
Beside your bed.¹²⁾

母の殻を打破る決意が明確に示されたのは ‘Sons and Lovers’ のラストシーンにおいてであり、それは Lawrence の成熟にとって大いなる意義を持つものである。

“ ‘Mother!’ he whispered—mother!”

She was the thing that held him up, himself, amid all this. And she was gone, intermingled herself. He wanted her to touch him, have him alongside with her. But no, he would not give in. Turning sharply, he walked towards the city's gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked toward the faintly humming, glowing town, quickly.”¹³⁾

「お母さん、お母さん」と彼は低い声でいった。
巨大な夜に対して彼を支えてくれるのは、彼の母親だけであった。

そしてその母親は、今は彼のもとを去って、夜の一部分になっていた。

彼は母親に、自分にさわってもらいたかった。

その傍においてもらいたかった。

しかし彼は、まだ負けるつもりはなかった。

彼は急に向き直って、夜空を明るくそめる町の方へもどっていった。

彼はこぶしをにぎりしめ、口を固く結んでいた。

彼は暗闇の方向に、母親のあとを慕っていかうとは思わなかった。

彼は微かに音を立てている、明るい光を放つ町の方へ、

急ぎ足で歩いていった。¹⁴⁾

Lawrence は“母の死”に当面してからも、なかなか ‘wanted her to touch him, have him alongside with her’ という気持をはねのけることが出来なかった。しかし ‘But, no—’ 以下にみられるように“暗闇の方向に母のあとを慕って” いかないで“微かに音を立てている明るい光を放つ町の方へ” すすんで行った。しかも“急ぎ足で” 行ったのである。

成熟とは、何かを獲得することではなくて、何かを失うことであり、何かを失ったことを確認することである。Lawrence の成熟もまた、その例外ではない。

母と子の肉感的なつながりに頼っている者に、真の成熟がないように、母からむりやりに拒否された息子にも真の意味での成熟はない。それは単なる喪失感であって、“郷愁” を根底に秘めた、見せかけの成熟にすぎない。

真の意味における成熟は a rejecting mother を超え、an overprotective mother をも超えてはじめて果されるものであり、深い不毛の喪失感を確認することによってのみ獲得されるものである。そうした起伏や振幅が大きければ大きい程、成熟の度合も大きいのである。

III. Conclusion :-

Lawrence は母の死によってはじめて“成熟”のきっかけをつかんだとも、又“成熟”することは何かを失うことであるとも述べた。すなわち、成熟することは自由でのびのびしたものではなく、たまらなく空虚で、不自由なものである。

Lawrence は an overprotective mother との動物的むすびつきを基盤としてこの自由を満喫し、それに固執した。Lawrence はこの自由をうばわれた時、この

上なく不自由を感じた。R.A. Taylor と Garnett にあてた手紙は、そうした心理を如実に示している。

"My mother was a clever, ironicaldelicately moulded woman of good, old old burgher descent. She married below her. My father was dark, ruddy, with a fine laugh. He is a coal miner. He was one of the sanguine temperament, warm and hearty, but unstable: he lacked principle, as my mother would have said. He decided her and lived to her. She despised him—he drank. Their marriage life has been one carnal, bloody fight.

I was born hating my father; as ever I can remember, I shivered with horror when he touched me. He was very bad before I was born."¹⁵⁾

そして、"これが私と母との間の一つの bond (きずな) になっている"と書いており、次いで

"We have loved each other, almost with a husband and wife love, as well as filial and maternal. We know each other by instinct. She said to my aunt—about me:— 'But it has been different with him. He has seemed to be part of me.'—

And that is the real case. We have been like one, so sensitive to each other that we never needed words. It has been rather terrible and has made me, in some respects, abnormal. I think this peculiar fusion of soul never comes twice in a life-time—it doesn't seem natural. When it comes it seems to distribute one's consciousness far abroad from oneself, and one understands! I think no one has got 'understanding' except through love."

そして最後に

"Nobody can have the soul of me my mother have had it, and nobody can have it again. Nobody can come into my an atmosphere."¹⁶⁾と結んでいる。

とくに、'We have loved each other, almost with husband and wife, as well as filial and maternal.'の箇所は、Lawrence と母との異常な"きずな"を示すものである。'The Dark Sun' に引用されている、Garnett あての手紙も、それと同種のものである。

"A woman of character and refinement goes

into the lower class, and has no satisfaction in her own life. She has had a passion for her husband, so the children are born of passion, and have heaps of vitality.

But as her sons grow up, she selects them as lovers— These sons are urged into life by their reciprocal love of their mother-urged on and on. But when they come to manhood, they can't love, because their mother is the strongest power in their lives, and holds them-----

As soon as the young men come into contact with woman there is a split — The son loves the mother—all the sons hate and are jealous of the father. The battle goes on between the mother and the girl, with the son as object. The mother gradually proves the stronger, because of the tie of blood. The son decides to leave his soul in his mother's hands, and, like his elder brother, go for passion. Then the split begins to tell again. But, almost unconsciously, the mother realises what is the matter and begins to die. The son casts off his mistress, attends to his mother dying. He is left in the end naked of everything, with the drift toward death."¹⁷⁾

母を失った Lawrence の苦悩は、この手紙では"死に向って漂う"暗い気持ちで終わっているけれども'Sons and Lovers'では、明るい希望をはのめかす、Lawrence の決意がはっきりと示されていることは前述の通りである。

その瞬間 Lawrence は、母と子の自然的世界だけで生きることを拒否して、社会の中で、即ち"人間と人間"との結びつきを求めていかねばならないことを自覚したのである。それは Lawrence にとって成熟のきっかけであると共に、Lawrence がはじめて示した社会的関心の発露でもあった。'Sons and Lovers'以後 Lawrence は"人間と人間の間に橋を架けること"を目指した。それは明らかに"成熟"の感覚である。そこには、母と子との倒錯的世界でしか味わったことのない自由を、社会的な人間関係の中で獲得しようとする Lawrence の意志が脈うっている。

'Rainbow'から'Women in Love'へ、そして'The Plumed Serpent'へ、最後に'Lady Chatterleys' Lover'へとつづく一連の作品の中で、Lawrence は'Sons and Lovers'におけるよりも、ずっと拡大した、

明確な、Scandal 的な、又イギリスの社会道徳をおびやかすような形で、“幼児のテーマ”を自分自身の上に刻みつけたのである。しかし、そのテーマからは絶対に逃げ出すことは出来なかった。

‘Sons and Lovers’のテーマは、あらゆる Variation をもって展開、反覆された。‘The Rainbow’は Lawrence の理想とする人間関係を象徴的高さに持上げた作品であり、‘Lady Chatterley’s Lover’は、その具体的な理想像なのである。

Lawrence が人間と人間の結びつきを、男性同志の結合によって完成しようとして果さず、Melors と Connie の合体という——すなわち、男と女の霊肉一致の世界で完成しようとしたことは、その哲学が、政治的、社会的、歴史的開放を前提としてのみ成立つ一つの仮説にすぎないという観点からすれば、Lawrence は、遂に正常な社会人としての成熟をなしえなかった敗残者ということになる。

Lawrence が男性同志の結合によって新社会を建設するという方向に向ったときに、彼はもっとも具体的に資本主義社会の悪を粉砕すべき一步を踏み出したのである。しかし Lawrence 自身の egoism が彼の行動を鈍らせてしまった。彼は egoism を放棄して全体に奉仕しようとしないうで、egoism を保つために、彼の所謂“闇の神”を登場させたのである。

Lawrence が‘Sons and Lovers’のテーマを‘Lady Chatterley’s Lover’に結実させたことは、母へのこの上ない反逆であったとも考えられるが、an overprotective mother のおしつけがましい情緒に拘束された人間の辿る自然発生的な宿命ではなかっただろうか。

Lawrence が社会的未熟児か、道徳的異端者かという論議の正否は別にしても、Lawrence がそうした宿命をになったことを、an overprotective mother に転嫁するのは不合理なのであろうか。

幼くして母から拒否された子のたどる宿命も、母の過保護によって成熟を果せぬ子のたどる宿命も、いずれにせよ、母の egoism に起因していることはまちがいない

いといつてよからう。

母の拒否と過保護については、Erikson のいうように、自然的、社会的、歴史的背景の相異や、東洋と西洋における、風土と慣習の相異によって、一概にはいえないうにしても、東西の別を問わず、ロレンス的であると非ロレンス的であるとの別なく、全世界が絆を正して当面しなければならぬ重要なテーマであるのは申すまでもない。

Erikson が指摘する、a rejecting mother がもたらす精神病理学の問題も、an overprotective mother がもたらすロレンス的人間像も、あるいは一つの極端な場合かもしれないが、双方の立っている人間的基盤は、全世界の人類に共通のものである。

D. H. Lawrence は、かつてその unique な“性”哲学でそうしたのと全く同様に、‘maternity’の問題をひき上げて、現代社会に重大な問題を提起しているのである。

Bibliography :-

- 1) E.H. Erikson: *Childhood and Society*, p.288, 1963, W.W. Norton.
- 2) Ditto., p.290.
- 3) Ditto., p.290.
- 4) Ditto., p.291.
- 5) Ditto., p.291.
- 6) Ditto., p.292.
- 7) V.D.S. Pint: *The Collected Poems of D.H. Lawrence*, p.111, 1964, Heinemann.
- 8) Spilka: *Love Ethics of D.H. Lawrence*, p.121, 1958, Dobson.
- 9) V.D.S. Pint: op. cit. p.118.
- 10) Spilka, op. cit. p.84.
- 11) Ditto.
- 12) V.D.S. Pint: op. cit. p.102.
- 13) D.H. Lawrence: *Sons and Lovers*, p.511, 1966, Penguin Books.
- 14) 吉田健一訳:「息子と恋人(下)」p.238, 1950, 小山書店.
- 15) H.T. Moore: *The Collected Letters of D.H. Lawrence*, p.69, 1962, Kingswood.
- 16) Ditto.
- 17) Graham Hough: *The Dark Sun*, pp.35-36, 1966, Gerald duckworth.
H.T. Moore: *The Collected Letters of D.H. Lawrence*, p.76, 1962, Kingswood.